中期目標の達成状況報告書
（第３期中期目標期間終了時）

2022年６月

東京芸術大学

目　　次

Ⅰ．法人の特徴　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ．４年目終了時評価結果からの顕著な変化　・・・・・・・・・・・4

１　教育に関する目標　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

（１）中期項目１－１　教育の内容及び教育の成果等 ・・・・・・・4
（２）中期項目１－２　教育の実施体制等 ・・・・・・・・・・・・・8
１－２－１・・・・・・・・・・・・・・・・8
１－２－２・・・・・・・・・・・・・・・・11
（３）中期項目１－３　学生への支援 ・・・・・・・・・・・・・・・13
（４）中期項目１－４　入学者選抜 ・・・・・・・・・・・・・・・・16

２　研究に関する目標　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

（１）中期項目２－１　研究の水準及び研究の成果等 ・・・・・・・19
（２）中期項目２－２　研究実施体制等 ・・・・・・・・・・・・・・24

３　社会との連携や社会貢献及び地域を志向した

教育・研究 に関する目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

３－１－１・・・・・・・・・・・・・・・27
３－１－２・・・・・・・・・・・・・・・31

４　その他の目標 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33

（１）中期項目４－１　グローバル化 ・・・・・・・・・・・・・・・33
４－１－１・・・・・・・・・・・・・・・33
４－１－２・・・・・・・・・・・・・・・35
４－１－３・・・・・・・・・・・・・・・38
４－１－４・・・・・・・・・・・・・・・40
（３）中期項目４－３　男女共同参画推進 ・・・・・・・・・・・・42

※本報告書は、４年目終了時評価結果を変えうるような顕著な変化を記載したものである。

Ⅰ．法人の特徴

大学の基本的な目標（中期目標前文）

東京芸術大学は、創設時から１２０余年に亘り、我が国の芸術文化の継承・発展に寄与するとともに、国際社会を指向した教育研究を展開し、国際舞台で活躍する数多の芸術家・研究者を育成してきた。

本学では、今後、「グローバル化」や「少子高齢化」等の社会の急激な変化においても、これまでの伝統と遺産を継承するとともに、国際プレゼンスの更なる向上を目指して、学長の確固たるリーダーシップの下、学生及び教職員、卒業生等関係者を含めた“オール藝大”体制を構築し、グローバル展開を基軸とした大胆な大学改革・機能強化を断行することとし、長きに亘り培ってきた国際的な強み・特色を武器に、我が国の芸術文化潜在力を活かした様々な戦略を策定・実行することで、“世界最高峰の芸術大学”への飛躍を目指すとともに、我が国の芸術文化力向上に資する。

併せて、本学の教育研究力強化や国際プレゼンス向上等に資するための国内外へのネットワークやマネジメントシステム等を確立すべく、持続可能型の大学経営基盤の構築・拡充を図る。

１．教育に関する基本的目標

世界一線級のアーティストユニット誘致等により、世界最高水準の教育研究体制を確立し、少人数教育の充実や大学院実践型プログラムの強化を図るとともに、国際共同カリキュラムや飛び入学をはじめとする早期教育の実施等、世界トップレベルの人材育成プログラムを構築し、国際舞台で活躍できる卓越した芸術家・研究者を育成する。

２．研究に関する基本的目標

伝統文化の継承と新しい芸術表現の創造を推進するとともに、本学が有する芸術文化力を基軸とした研究シーズを活かし、分野横断的な学際的研究を拡充・展開するほか、“芸術と科学技術の融合”による革新的なイノベーション創出“アートイノベーション”を推進し、研究成果の社会実装化による新たな産業創出や社会システム革新等を牽引する。

３．社会貢献に関する基本的目標

“上野の杜”はもとより、日本全域、さらには海外へと教育研究活動・社会貢献活動の場をボーダーレスに進展させ、大学の教育研究活動として位置付け実行する社会的・国際的な芸術実践活動“グローバルアートプラクティス”を多様なフィールドで展開するとともに、活動成果を広く社会に還元する。

本学は、その前身である東京美術学校、東京音楽学校の創立以来、我が国の芸術教育研究の中枢として、日本文化の伝統とその遺産を守りつつ、西欧の芸術思想及び技術を摂取、融合を図り幾多の優れた芸術家、中等教育から高等教育に亘る芸術分野の教育者・研究者を輩出してきた。こうした歴史的経緯を踏まえ、我が国唯一の国立総合芸術大学として、創立以来の自由と創造の精神を尊重し、我が国の芸術文化の発展について指導的役割を果たすことが本学の使命であると考え、また、この使命の遂行のため、次のことを基本的な目標として掲げている。

１．世界最高水準の芸術教育を行い、高い専門性と豊かな人間性を有した芸術家、芸術分野の教育者・研究者を養成する。

２．国内外の芸術教育研究機関や他分野との交流等を行いながら、伝統文化の継承と新しい芸術表現の創造を推進する。

３．心豊かな活力ある社会の形成にとって芸術のもつ重要性への理解を促す活動や、市民が芸術に親しむ機会の創出に努め、芸術をもって社会に貢献する。

なお、これらの使命と目標を踏まえた取組を、スピード感をもって実行するため、平成 28 年 6 月に「東京藝術大学 学長宣言 2016　～芸術の持つ無限の可能性～ 」及び「東京藝術大学 大学改革・機能強化推進戦略 2016」を、平成 29 年 10 月には「東京藝術大学 NEXT 10 Vision」新たに策定し、学長の強力なリーダーシップの下、全学一丸となって、様々な大学改革を断行している。

［個性の伸長に向けた取組（★）］

○海外一線級アーティストユニット誘致を基軸とした教育研究組織・人材育成プログラム改革等による世界トップアーティストの戦略的育成

長きに亘り培ってきた伝統的な芸術教育手法や、社会的要請を踏まえた芸術教育内容を継承しつつ、グローバル人材育成を推進するための世界水準の教育を実施し、確固とした基礎技術や高い芸術性を備えることはもとより、芸術における国際展開やイノベーションの実践、現代社会と有機的な関係を持つことができる創造的人材を育成する。

(関連する中期計画)
・１－１－１－３、１－１－１－４
・１－２－１－１、１－２－１－２、１－２－１－３
・４－１－１－１、４－１－１－２、４－１－２－１、４－１－４－２

○国内外一線級アートプロデュースユニット誘致を中核とした教育研究組織・人材育成プログラム改革等による世界展開力・大学経営力強化

国内外一線級のプロデューサーやディレクター、キュレーター等との連携・ネットワーク基盤を構築し、我が国のアーティスト・作品成果等芸術文化価値の世界展開を牽引する『世界を席巻するアートプロデュース人材育成』のための戦略的な大学院組織整備や先駆的な人材育成プログラム構築を推進するとともに大学の経営力を高めるための発信力強化やブランディング等国際プレゼンス向上のためのマネジメント改革を実行する。

(関連する中期計画)
・１－１－１－３
・１－２－１－１、１－２－１－２，１－２－１－３
・４－１－３－１、４－１－４－２

○我が国固有の芸術文化力や産学官連携基盤を活かした教育研究組織・人材育成プログラム改革等によるイノベーション創出・国際芸術拠点形成

我が国が世界に誇る芸術文化力を武器に、世界展開を視野に入れた産学官連携基盤を活かしたイノベーション創出等を担う『世界を先導するアートイノベーション人材育成』のための戦略的な組織整備や先導的な人材育成プログラム構築を推進するとともに、”上野の杜”の芸術文化資源を活かし、アジアにおける中核拠点としての機能を抜本的に強化することにより世界を代表する『国際芸術教育研究拠点』へ飛躍する。

(関連する中期計画)
・１－１－１－４
・１－２－１－３
・２－１－１－１、２－１－１－４
・２－２－１－１
・３－１－１－１

［戦略性が高く意欲的な目標・計画（◆）］

○海外一線級アーティストユニット誘致を基軸とした「グローバル展開戦略」

我が国唯一の国立総合芸術大学のミッションや固有の強み・特色を踏まえ、国家戦略実行のフロントランナーとして、海外一線級アーティストユニット誘致による指導体制強化や教育研究組織改革、世界トップアーティストの戦略的育成のための人材育成プログラム改革等、“世界の頂”へと飛躍するための『グローバル展開戦略（国立大学機能強化事業)』の着実な実行はもとより、世界と戦うための『重点戦略分野』を明確化し、発展的・加速度的に展開するものである。なお、これらに関する取組の指標に関しては高い目標（数値）を設定し、学長のリーダーシップの下“オール藝大”で展開することとしている。

（関連する中期計画）

・１－１－１－３
・４－１－１－１、４－１－１－２
・４－１－２－１、４－１－２－２
・４－１－３－１、４－１－３－２

Ⅱ．４年目終了時評価結果からの顕著な変化

１　教育に関する目標

（１）１－１　教育の内容及び教育の成果等に関する目標

４年目終了時評価結果を変えうるような顕著な変化があったと判断する取組は、以下のとおりである。

小項目 1-1-1	**【Ⅰ－１－（１）－１】** 長きに亘り培ってきた伝統的な芸術教育手法や、社会的要請を踏まえた芸術教育内容を継承しつつ、グローバル人材育成を推進するための世界水準の教育を実施し、確固とした基礎技術や高い芸術性を備えることはもとより、芸術における国際展開やイノベーションの実践、現代社会と有機的な関係を持つことができる創造的人材を育成する。

≪特記事項≫

○優れた点

①	国際共同教育プログラムの蓄積・成果に基づく更なる発展として、大学院美術研究科において、タイのシラパコーン大学と博士後期課程のダブル・ディグリープログラムを構築・開始した。また、同・修士課程では、ポーランドのヴロツワフ大学とダブル・ディグリープログラムを創設した。(中期計画1-1-1-3)
②	大学院映像研究科において、「日中韓学生アニメーション共同制作 co-work」を、初めての試みとして、企画から仕上げまでの共同制作の全てのプロセスをオンラインで実施した。また、成果に基づく発展として、韓国芸術総合学校との間でダブル・ディグリープログラムを構築したほか、これまでの取組をASEAN諸国にも拡大するプロジェクトとして、「日中韓＋ASEANの文化・経済圏発展に向けた、アニメーション教育・研究のための共創プラットフォーム構築」を令和３年度に開始した。(中期計画1-1-1-3)
③	大学院映像研究科ゲームコースにおいて、南カリフォルニア大学とのオンラインを活用した国際的な双方向の教育手法を実施し、教員・学生の交流・制作・講評会、ゲーム作品の共同制作におけるBurndown Chart(制作進行表)を用いたチームメンバーの役割や各工程の重要度等の視覚化、成果発表展覧会のオンライン開催等、ウィズコロナ／ポストコロナにおける有効なモデルケースを示すことができ、令和２年10月の教育再生実行会議高等教育ワーキング・グループにおいて効果的な事例として紹介された。(中期計画1-1-1-3)
④	令和２年度、第71回ベルリン国際映画祭コンペティション部門において、大学院映像研究科映画専攻の修了生らが監督・脚本・撮影・録音・美術を担当して制作した映画『偶然と想像』が、審査員大賞（銀熊賞）を受賞した。本作は、濱口竜介監督をはじめ、修了生がメインスタッフとして複数名参加しており、映画専攻で出会った縁から広がり、世界的な映画祭における受賞という快挙へ繋がった。また、令和３年度、第74回カンヌ国際映画祭で、濱口竜介監督による「ドライブ・マイ・カー」が脚本賞を受賞した。日本作品の脚本賞受賞は史上初めての快挙であり、同作品は国際映画批評家連盟賞とエキュメニカル審査員賞、AFCAE賞も受賞した。濱口監督は、令和２年度にイタリアのベネチア国際映画祭で監督賞に選ばれた「スパイの妻」にも共同脚本として参加しており、世界３大映画祭の全てで主要な賞を受賞したことになる。

○特色ある点

①	４年目終了時の評価結果を変えうるような顕著な変化と判断できる取組等は特になし。

○達成できなかった点

①	４年目終了時の評価結果を変えうるような未達成事項等は特になし。

≪中期計画≫

中期計画 1-1-1-1		【１】学士課程においては、引き続き専門教育及び教養教育の質の確保・充実を図るとともに、外国語教育の充実を段階的に推進することとし、さらに、教育内容の国際通用性を高めるため、平成２９年度を目途に科目ナンバリングやシラバスの英語化等の取組を完了させるなど、グローバル人材育成に向けた取組を総合的に推進する。		
中期目標期間終了時 自己判定		【２】中期計画を実施している	４年目終了時 判定結果	【２】中期計画を実施している

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) 専門教育及び教養教育における、学部・学科を超えた交流科目および、アーティストとしての外国語運用能力向上に係る授業科目等の充実を図る。	予定通り取組を実施した。
(B) シラバスの内容や参照性等について、更に改善を図る。	予定通り取組を実施した。

中期計画 1-1-1-2		【２】音楽学部においては、平成２８年度より導入する飛び入学をはじめとする早期教育制度を適切に運用しつつ、発展的に展開するとともに、毎年度、自己点検・評価を実施し、結果の公表や制度の検証・改善を行う。		
中期目標期間終了時 自己判定		【２】中期計画を実施している	４年目終了時 判定結果	【２】中期計画を実施している

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) 飛び入学制度および専用カリキュラムの安定的な運用。	予定通り取組を実施した。
(B) 持続的なプロジェクトの実施・展開に向けた財源の確保等の自助努力の充実。	予定通り取組を実施した。
(C) ジュニア・アカデミーの持続的な運営。	予定通り取組を実施した。
(D) 早期教育に係る研究の推進および、各制度やプロジェクトに係る継続的な自己点検・評価の実施。	予定通り取組を実施した。

中期計画 1-1-1-3	★ ◆	【３】大学院課程では、「海外一線級アーティストユニット」の参加による国際共同プログラムの実施等、世界最高水準の人材育成プログラムを行うとともに、平成２９年度までに、国際交流協定締結校との国際共同カリキュラム（ジョイントディグリー）を整備・実施し、その教育的効果の検証を行う。また高度な博士人材育成のための芸術実践領域（実技系）博士プログラムを発展させ、平成２９年度より、修士課程・博士課程の５年間を通じた高度人材育成プログラムを構築することにより、芸術分野において先導的役割を担う卓越した芸術家・研究者育成を推進する。		
中期目標期間終了時 自己判定	【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A)新たに設置した研究科・専攻において、カリキュラムおよび教育効果・成果の継続的な検証と改善を行う。	予定通り取組を実施した。
(B) 各分野における国際共同教育プログラムの教育効果について継続的な検証を行うとともに、国際共同学位課程(ダブルディグリーまたはジョイントディグリー)への移行に係る検討を進める。	国際共同教育プログラムの蓄積・成果に基づく更なる発展として、大学院美術研究科において、タイのシラパコーン大学と博士後期課程のダブル・ディグリープログラムを構築・開始した。また、同・修士課程では、ポーランドのヴロツワフ大学とダブル・ディグリープログラムを創設した。 加えて、大学院映像研究科において、「日中韓学生アニメーション共同制作　co-work」を、初めての試みとして、企画から仕上げまでの共同制作の全てのプロセスをオンラインで実施した。**(別添資料27-01)** また、成果に基づく発展として、韓国芸術総合学校との間でダブル・ディグリープログラムを構築したほか、これまでの取組をASEAN諸国にも拡大するプロジェクトとして、「日中韓＋ASEANの文化・経済圏発展に向けた、アニメーション教育・研究のための共創プラットフォーム構築」を令和３年度に開始した。**(別添資料27-02)** 更に、映像研究科ゲームコースにおいて、南カリフォルニア大学とのオンラインを活用した国際的な双方向の教育手法を実施し、教員・学生の交流・制作・講評会、ゲーム作品の共同制作におけるBurndown　Chart(制作進行表)を用いたチームメンバーの役割や各工程の重要度等の視覚化、成果発表展覧会のオンライン開催等、ウィズコロナ／ポストコロナにおける有効なモデルケースを示すことができ、令和２年10月の教育再生実行会議高等教育ワーキング・グループにおいて効果的な事例として紹介された。**(別添資料27-03,04,05)**
(C)特別選別制度による派遣者オーディションを毎年度実施するとともに、派遣者に係るフォローアップ調査等を進める。	予定通り取組を実施した。
(D)海外大学・機関等との連携について、持続可能性や将来的な発展性等を踏まえ、質的充実に向けた検討を進める。	予定通り取組を実施した。

中期計画 1-1-1-4	★	【４】地域社会や産業界、海外関係機関等との連携協力により、実践的な教育研究の場を構築し、社会実践プログラムとして発展させ、学部・大学院全ての学生を対象とした課題解決型・社会実践型の芸術教育を行う。		
中期目標期間終了時 自己判定		【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) 産業界や自治体等とのネットワークを拡大し、新しい共同事業・共同研究等を積極的に推進することで、多様な社会実践の場を教育プログラムとして活用していく。	予定通り取組を実施した。
(B) ～ (E) 上記を踏まえ、各学部・研究科の特色を活かした実践的な教育研究を広く展開していく。	予定通り取組を実施した。

（２）１－２　教育の実施体制等に関する目標

４年目終了時評価結果を変えうるような顕著な変化があったと判断する取組は、以下のとおりである。

小項目 1-2-1	**【Ⅰ－１－（２）－１】** 学生の創造性を最大限に引き出す環境を整備するため、専門教育環境を堅持しつつ、その充実を図る。また、グローバル人材育成等社会的要請を踏まえた教育体制・環境を整備するため、教育研究組織の見直しをはじめとする学内教育資源の再配分・最適化を行う。

≪特記事項≫

○優れた点

①	ウィズコロナ／アフターコロナを見据え、「芸術の新しい場所」として「東京藝大デジタルツイン」をオープンした。同取組はICTを活用した新しい表現やコミュニケーションを追求し、本学の様々な活動や教育研究成果をデジタル空間上で実践・発信することにより、世界中の人々に芸術が共にあるより豊かな日常を届け、また、次世代を担う芸術の若き才能たちに、活躍と鍛錬の場を提供することを目的としている。 令和２年度は、本学で開催されたコンサートや特別レクチャーの有料配信を行う「プレミアムコンテンツ」、芸術の若い才能や表現、新しい動きなどを伝える情報やトークセッション等を発信する「コミュニティ」等のコンテンツを制作・公開した。 令和３年度には更に取組を進め、バーチャル空間における活動やコンテンツ発信の基盤となるWebプラットフォームを構築するとともに、3Dスキャナや配信スタジオ・機材を新たに整備し、教員・学生が教育研究活動や各自の制作・発信に活用することができる環境を構築した。（中期計画1-2-1-2）

○特色ある点

①	令和３年度、株式会社ヤマハミュージックジャパンおよび株式会社河合楽器製作所の寄附により、「第一回 藝大ピアノコンクール」を実施した。外部審査委員による厳正な審査で選ばれた受賞者３名には奨学金が贈られ、受賞者演奏会がカワイ表参道コンサートサロン「パウゼ」とヤマハ銀座コンサートサロンで開催された。（中期計画1-2-1-2）

○達成できなかった点

①	４年目終了時の評価結果を変えうるような未達成事項等は特になし。

≪中期計画≫

中期計画 1-2-1-1	★	【５】本学の伝統であり、芸術教育に欠かせない、少人数教育・個人指導を着実に実施するための教員配置等指導体制を整備するとともに、ロンドン芸術大学等海外一流大学等から卓越した芸術家・指導者を継続的に招聘・配置することにより、指導体制の強化・充実を図る。		
中期目標期間終了時 自己判定		【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) 個人指導・少人数教育を更に充実する為の、実技指導、工房・スタジオ等での実習を支える専門スタッフの拡充について検討を進める。	予定通り取組を実施した。
(B) ～ (E) 各学部・研究科および全学において、海外一流大学や産業界等からの多様な芸術家・指導者および実務家等の継続的な招聘・配置を行うとともに、オンラインによる教育の充実等を図る。	予定通り取組を実施した。

中期計画 1-2-1-2	★	【６】大学における教育システムの一環として、国内及び海外における展覧会・演奏会等、学外において多様な制作・発表等活動の場を確保し、教育研究活動の成果を積極的に発信する。		
中期目標期間終了時 自己判定		【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) ～ (J) 大学美術館や奏楽堂等、本学の教育研究成果の発信に係る中核的な施設の計画的な運営・修繕を行いつつ、学外における成果発表の場を拡充する為、地方自治体や民間企業、各種芸術文化施設等とのネットワークを拡大していく。	ウィズコロナ／アフターコロナを見据え、「芸術の新しい場所」として「東京藝大デジタルツイン」をオープンした。同取組はICTを活用した新しい表現やコミュニケーションを追求し、本学の様々な活動や教育研究成果をデジタル空間上で実践・発信することにより、世界中の人々に芸術が共にあるより豊かな日常を届け、また、次世代を担う芸術の若き才能たちに、活躍と鍛錬の場を提供することを目的としている。 令和２年度は、本学で開催されたコンサートや特別レクチャーの有料配信を行う「プレミアムコンテンツ」、芸術の若い才能や表現、新しい動きなどを伝える情報やトークセッション等を発信する「コミュニティ」等のコンテンツを制作・公開した。令和３年度には更に取組を進め、バーチャル空間における活動やコンテンツ発信の基盤となるWebプラットフォームを構築するとともに、3Dスキャナや配信スタジオ・機材を新たに整備し、教員・学生が教育研究活動や各自の制作・発信に活用することができる環境を構築した。**(別添資料27-06)** また、令和３年度、株式会社ヤマハミュージックジャパンおよび株式会社河合楽器製作所の寄附により、「第一回 藝大ピアノコンクール」を実施した。外部審査委員による厳正な審査で選ばれた受賞者３名には奨学金が贈られ、受賞者演奏会がカワイ表参道コンサートサロン「パウゼ」とヤマハ銀座コンサートサロンで開催された。**(別添資料27-07)**

中期計画 1-2-1-3	★	【７】グローバル人材育成を推進するため、平成２８年度に独立研究科をはじめとする新たな大学院組織を整備するとともに、教育組織・指導体制見直し等の学内資源の再配分・最適化を継続的に行い、社会的要請に即応した教育推進体制を構築する。		
中期目標期間終了時 自己判定		【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) ～ (D) 新研究科・新専攻における教育活動・成果の継続的な検証と改善。	予定通り取組を実施した。
(E) 新たに創設したセンターおよび機構を基盤として、早期教育および産学連携や異分野融合を通じたアートイノベーションの促進に係る取組を展開する。	予定通り取組を実施した。

小項目 1-2-2	**【Ⅰ－１－（２）－２】** 　世界的な人材育成拠点として相応しい教育力の向上を図るため、芸術分野の特性に応じたＦＤ等を実践する。

≪特記事項≫

○優れた点

①	４年目終了時の評価結果を変えうるような顕著な変化と判断できる取組等は特になし。

○特色ある点

①	４年目終了時の評価結果を変えうるような顕著な変化と判断できる取組等は特になし。

○達成できなかった点

①	４年目終了時の評価結果を変えうるような未達成事項等は特になし。

≪中期計画≫

中期計画 1-2-2-1		【８】学生による授業評価アンケート等を定期的に実施し、評価結果を教育内容の改善・充実に繋げるとともに、公開型講評会や公開レッスン等をＦＤ研修として、相互評価・第三者評価に活用することにより、教育力向上に繋げる。	
中期目標期間終了時 自己判定	【２】中期計画を実施している	４年目終了時 判定結果	【２】中期計画を実施している

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) 授業評価アンケートを継続的に実施し、定量的・定性的な分析により経年変化等を捉え、授業改善やＦＤに役立てていく。	予定通り取組を実施した。
(B) ～ (C) 各学部・研究科において、引き続き、産業界や海外大学等から外部人材を招聘しての公開型の講評会・試験演奏会等を積極的に実施し、芸術分野の特性を踏まえたＦＤの充実に繋げる。	予定通り取組を実施した。

（３）１－３　学生への支援に関する目標

４年目終了時評価結果を変えうるような顕著な変化があったと判断する取組は、以下のとおりである。

小項目 1-3-1	**【Ⅰ－１－（３）－１】** グローバル化時代における多様なニーズに対応するため、学習支援・生活支援・経済支援体制を拡充する。

≪特記事項≫

○優れた点

①	令和３年度、本学の音楽学部および大学院音楽研究科はSir Elton John Global Exchange Programmeへの参加を開始した。このプログラムは、英国王立音楽院が主導し、同音楽院の卒業生であるエルトン・ジョン卿の寄付による基金で行われるもので、本学を含め世界各国の12の音楽大学が参加する、才能ある若い音楽家たちのグローバルモビリティと国際的なコラボレーションを促進する新しい取組である。これにより本学の学生が、英国王立音楽院、ジュリアード音楽院、パリ国立高等音楽・舞踊学校、ウィーン音楽大学等を含む、世界トップレベルの高等音楽教育機関に所属する学生による新たな国際教育交流に参加できるようになり、短期交流プロジェクト参加のための旅費や、１学期または１年間の交換留学ための授業料を受給することなどが予定されている。(中期計画1-3-1-2)
②	令和３年３月から５月にかけて、コロナ禍で苦しむ本学出身者（在学生を含む）を対象に、新たな作品発表の場を提供し、育成・支援を行うため、オンライン上で「東京藝大アートフェス2021」を開催した。203人の若手アーティストによる310点の応募作の中から選出された119点が特設Webサイトで発信され、一定期間の公開後、本学教員およびゲスト審査員による審査を経て、37名の受賞者が決定し、賞及び賞金が授与された。東京藝大アートフェスは、美術館で絵を展示する、音楽ホールで演奏会を開く、映画館で映像を上映する、という建物の中で作品を発表するという手段ではなく、美術も音楽も映像もデジタルデータにすることによって、同じプラットフォーム上に並べ、異なる研究領域が発表の場を共有することによって、互いに横断的に刺激し合うことがこれまで以上に活発になり、新たな表現が生まれてくる大きなきっかけとなった。加えて、ソーシャルメディアとも連携することで、国内のみならず海外まで含めた多くの方の目に留まり、アーティストと興味を持った支援者とを直接繋ぐことが可能な仕組みとした。(中期計画1-3-1-2)

○特色ある点

①	コロナ禍により大きな影響を受けている若手芸術家に対して、芸術活動の持続化を支援するための「若手芸術家支援基金」を創設し、芸術の力を未来へと繋ぐ若手芸術家たちの「今を救うこと」と「未来のカタチを模索すること」の２つを使命として掲げ、一般企業からの協賛金や藝大基金への一般の方々からの寄附、クラウドファンディングによる約3,725万円の支援金等を集め、様々な支援策を実施した。(中期計画1-3-1-2)

○達成できなかった点

①	４年目終了時の評価結果を変えうるような未達成事項等は特になし。

≪中期計画≫

中期計画 1-3-1-1		【９】平成３０年度までに附属図書館改修に伴う機能強化により、学生の自主的・自律的な学習支援を充実させるとともに、専門性や国籍を超えた多様な学生間交流を実現する。また、女子学生や障がいを抱えた学生に配慮したダイバシティなキャンパス環境整備や支援体制強化を図る。		
中期目標期間終了時 自己判定		【２】中期計画を実施している	４年目終了時 判定結果	【２】中期計画を実施している

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) グローバル展開等に係る新たな取組として、2021年度末までに大学会館の改修工事を行い、専門性や国籍を超えた多様な学生間交流を促進する為の国際交流拠点を整備する。	予定通り取組を実施した。
(B) 上記の拠点整備と一体的に、引き続き、ダイバシティなキャンパス環境の整備を着実に実施する。	予定通り取組を実施した。

中期計画 1-3-1-2		【10】海外渡航における経済的負担の軽減を目的としたプロジェクト基金を設立し、学生の留学・海外活動等を積極的に支援する。また、傑出した才能を有する学生を支援するため、平成２８年度から、新たに成績優秀学生への学生納付金免除制度を整備するとともに、平成２９年度から、在学中、特に優れた業績を上げた学生に対する特別奨学金制度を創設する。		
中期目標期間終了時 自己判定		【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A)～(K)　引き続き、学生の海外留学・海外活動に係る経済的支援制度や海外派遣プログラム等の機会を充実する為、寄附金等の募集強化や、海外大学・機関等との持続的なネットワークの構築を進めていく。	令和３年度、本学の音楽学部および大学院音楽研究科はSir Elton John Global Exchange Programmeへの参加を開始した。このプログラムは、英国王立音楽院が主導し、同音楽院の卒業生であるエルトン・ジョン卿の寄付による基金で行われるもので、本学を含め世界各国の12の音楽大学が参加する、才能ある若い音楽家たちのグローバルモビリティと国際的なコラボレーションを促進する新しい取組である。これにより本学の学生が、英国王立音楽院、ジュリアード音楽院、パリ国立高等音楽・舞踊学校、ウィーン音楽大学等を含む、世界トップレベルの高等音楽教育機関に所属する学生による新たな国際教育交流に参加できるようになり、短期交流プロジェクト参加のための旅費や、１学期または１年間の交換留学ための授業料を受給することなどが予定されている。**(別添資料27-08)** また、コロナ禍により大きな影響を受けている若手芸術家に対して、芸術活動の持続化を支援するための「若手芸術家支援基金」を創設し、芸術の力を未来へと繋ぐ若手芸術家たちの「今を救うこと」と「未来のカタチを模索すること」の２つを使命として掲げ、一般企業からの協賛金や藝大基金への一般の方々からの寄附、クラウドファンディングによる約3,725万円の支援金等を集め、様々な支援策を実施した。 上記基金による支援策の一つとして、令和３年３月から５月にかけて、コロナ禍で苦しむ本学出身者（在学生を含む）を対象に、新たな作品発表の場を提供し、育成・支援を行うため、オンライン上で「東京藝大アートフェス2021」を開催した。203人の若手アーティストによる310点の応募作の中から選出された119点が特設Webサイトで発信され、一定期間の公開後、本学教員およびゲスト審査員による審査を経て、37名の受賞者が決定し、賞及び賞金が授与された。 東京藝大アートフェスは、美術館で絵を展示する、音楽ホールで演奏会を開く、映画館で映像を上映する、という建物の中で作品を発表するという手段ではなく、美術も音楽も映像もデジタルデータにすることによって、同じプラットフォーム上に並べ、異なる研究領域が発表の場を共有することによって、互いに横断的に刺激し合うことがこれまで以上に活発になり、新たな表現が生まれてくる大きなきっかけとなった。加えて、ソーシャルメディアとも連携することで、国内のみならず海外まで含めた多くの方の目に留まり、アーティストと興味を持った支援者とを直接繋ぐことが可能な仕組みとした。**(別添資料27-09)** なお、本取組は、ヘイマーケットメディア（本社：英国）が主催する「PR Awards Asia」において、PR Event部門、Best Use of Digital(COVID-19)部門など、4つの部門で金賞等を受賞するなど、優れたPR事例として国内外のアワードを獲得した。

（４）１－４　入学者選抜に関する目標

４年目終了時評価結果を変えうるような顕著な変化があったと判断する取組は、以下のとおりである。

小項目 1-4-1	**【Ⅰ－１－（４）－１】** アドミッションポリシーに基づき、志願者一人一人の適性、能力を仔細に検証し、多角的・総合的に判断する入学者選抜方法を徹底するとともに、稀有な才能を有する者の積極的な受入れ等、グローバルスタンダードを踏まえた新たな入学者選抜方法を導入する。

≪特記事項≫

○優れた点

①	４年目終了時の評価結果を変えうるような顕著な変化と判断できる取組等は特になし。

○特色ある点

①	４年目終了時の評価結果を変えうるような顕著な変化と判断できる取組等は特になし

○達成できなかった点

①	４年目終了時の評価結果を変えうるような未達成事項等は特になし。

≪中期計画≫

中期計画 1-4-1-1		【11】本学の伝統である、受験者一人一人の基礎能力・判断能力・応用能力を判定する多角的・総合的な審査を継続する。またグローバルスタンダードを踏まえた明確なアドミッションポリシーを平成３０年度までに作成するとともに、ブランディング戦略の一環として、入試に係る広報・情報発信を積極的に行う。		
中期目標期間終了時 自己判定		【２】中期計画を実施している	４年目終了時 判定結果	【２】中期計画を実施している

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) 受験者一人一人の基礎能力・判断能力・応用能力を判定する多角的・総合的な入試を継続する為の安定的な体制に係る継続的な検証と改善。	予定通り取組を実施した。
(B) ～ (H) 入試説明会および、Webサイトや SNSを用いた入試広報・情報発信等の更なる充実。	予定通り取組を実施した。

中期計画 1-4-1-2		【12】音楽学部において、稀有な才能を有する者を対象として、入学後の特別カリキュラムを連動させた独自の飛び入学制度を平成２８年度から実施する。また、毎年国内５か所以上の市町村において、高校生以下を対象とする個人レッスンを中心とした早期教育プログラムを継続的に実施する。		
中期目標期間終了時 自己判定		【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) 飛び入学制度および専用カリキュラムの安定的な運用。	予定通り取組を実施した。
(B) ～ (C) 早期教育プロジェクトおよびジュニア・アカデミーの持続的な実施・展開に向けた体制整備や、財源の確保等の自助努力の充実。	予定通り取組を実施した。
(D) 飛び入学制度や早期教育プログラムに係る継続的な検証と改善の実施。	予定通り取組を実施した。

中期計画 1-4-1-3		【13】インターネットを活用したＷＥＢ出願システムを平成２９年度までに導入する。また、音楽学部の早期教育受講者に係る基本情報をはじめ、卒業生までを含め一元的に管理する総合的なデータベースを構築する。		
中期目標期間終了時 自己判定		【２】中期計画を実施している	４年目終了時 判定結果	【２】中期計画を実施している

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) Web出願システムについて、引き続き利便性の向上を図りつつ運用する。	予定通り取組を実施した。
(B) 総合的なデータベースの構築に向け、引き続き検討・試行を進める。	予定通り取組を実施した。

中期計画 1-4-1-4		【14】国内のみならず広く海外も対象として、多様な個性・特色・能力を有する学生を確保するため、平成２８年度以降、飛び入学制度の導入や国際バカロレア資格活用等をはじめとする新たな入試制度を段階的に導入する。		
中期目標期間終了時 自己判定		【２】中期計画を実施している	４年目終了時 判定結果	【２】中期計画を実施している

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) ～ (D) 各入試制度による入学者の教育成果等について検証を行うとともに、既存制度の見直しや新しい制度の導入等について引き続き検討を行う。	予定通り取組を実施した。

２　研究に関する目標

（１）２－１　研究の水準及び研究の成果等に関する目標

４年目終了時評価結果を変えうるような顕著な変化があったと判断する取組は、以下のとおりである。

小項目 2-1-1	【Ⅰ－２－（１）－１】 伝統文化の継承を確実に行うとともに、新しい芸術表現の創造やイノベーション創出、研究成果の社会実装化を推進し、我が国の芸術文化力の向上と戦略的な国際展開、産業競争力強化等に貢献する。

≪特記事項≫

○優れた点

①	令和３年度、本学COI拠点の研究成果である「だれでもピアノ®」が、「STI for SDGsアワード2021」で文部科学大臣賞（最優秀賞）を受賞した。同アワードは、科学技術イノベーションを用いて社会課題を解決する地域における優れた取り組みを表彰することで、その取り組みのさらなる発展や同様の社会課題を抱える地域への水平展開を促し、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に貢献することを目的として2019年に創設されたものであり、令和３年度は40件の応募の中から本学の取組が最優秀賞に選定された。(中期計画2-1-1-1)
②	文化財及び芸術資源の保存、修復及び活用の調査・研究を行うとともに、全国の大学の教員その他の者の共同利用に供することを目的として、令和３年２月、本学に「芸術資源保存修復研究センター」を創設した。同センターでは、災害による文化財の被害増加への対応、文化財保護法の改正に基づく文化財の活用促進、音楽・映像・デジタルアート等の保存技術が未確立な芸術作品の保存修復方法に係る研究開発等を実施するため、異分野融合・横断型の研究拠点として、芸術資源の保存・修復ネットワークの構築・強化を進めている。(中期計画2-1-1-3)
③	令和３年10月、本学をはじめとした12の大学・企業・団体の連携による、2030年以降の孤独・孤立の解決に向けた共創拠点計画が、国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)が公募する「共創の場形成支援プログラム」育成型(共創分野)プロジェクトとして採択されたことを受け、本学主導により「『共生社会』をつくるアートコミュニケーション共創拠点」を創設し、超高齢社会に向けて、産学官の協働による「芸術×テクノロジー」の研究で「誰もが孤立しない共生社会」を目指す大規模事業を開始した。(中期計画2-1-1-4)

○特色ある点

①	令和２年度、「あるがままのアート―人知れず表現し続ける者たち―」展を開催し、20,391名の来場者があった。同展覧会では、様々な理由で会場に直接訪れることが難しい方々を主な対象として、Webブラウザから現地のロボットを操作し、館内展示の様子を家族等と共に映像で鑑賞することができる「ロボ鑑賞会」を導入した。(中期計画2-1-1-2)
②	令和２年度、「Turn on the Earth」を開催し、6,490名の来場者を得た。展示室でAR（拡張現実）技術を活用したほか、オンライン上では展示作品の制作過程を体験できるワークショップを実施するとともに、展示室のVR空間を公開した。加えて、本展覧会の展開として、本学と包括連携協定を締結している香川県との共同により、国指定重要文化財・旧善通寺偕行社を舞台とした会場展示と三次元バーチャル展示を実施した。(中期計画2-1-1-2)
③	八王子特別支援学校からの受託研究において、美術教育研究室の教員と陶芸研究室の教員とが協働し、肢体不自由児の陶芸・塑造の授業の充実についての研究に取り組んだ。特に陶芸の授業については、陶芸研究室教員の陶土や焼成に関する指導・助言により、肢体不自由のある児童生徒の陶芸制作が充実し、作品の完成度も向上した。(中期計画2-1-1-3)

○達成できなかった点

①	４年目終了時の評価結果を変えうるような未達成事項等は特になし。

≪中期計画≫

中期計画 2-1-1-1	★	【15】文部科学省ＣＯＩ拠点事業「「感動」を創造する芸術と科学技術による共感覚イノベーション」において、芸術と科学技術の融合を基盤として、伝統文化の伝承・世界発信や教育・コミュニケーションに関する研究等を総合的に推進し、平成３３年度までには文化教育コンテンツや文化外交アイテムの開発・社会実装を実現する。		
中期目標期間終了時 自己判定		【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A)～(O) COI拠点におけるこれまでの活動によって得られた新たなコンテンツや表現方法を、自立的で持続的なイノベーション・プラットフォームの構築へとつなげていく。	令和３年度、本学COI拠点の研究成果である「だれでもピアノ®」が、JST主宰「STI for SDGsアワード2021」で文部科学大臣賞（最優秀賞）を受賞した。同アワードは、科学技術イノベーションを用いて社会課題を解決する地域における優れた取り組みを表彰することで、その取り組みのさらなる発展や同様の社会課題を抱える地域への水平展開を促し、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に貢献することを目的として2019年に創設されたものであり、令和３年度は40件の応募の中から本学の取組が最優秀賞に選定された。**(別添資料27-10)** 「だれでもピアノ®」（特許6744522）は、本学COI拠点がヤマハ株式会社と共同開発した、自動伴奏追従機能のついたピアノであり、一本指でメロディーを弾くと、伴奏とペダルが自動で追従して、熟練したピアニストのように華麗な演奏ができる。障がいのある児童・生徒を対象に音楽教育やワークショップで活用している他、高齢者を対象に継続的なピアノレッスンを通したウェルビーイングに関する研究を推進している。また、ICTを用いた低遅延でMIDI情報をオーディオ機器につなぐ技術の応用により、オンラインによる遠隔演奏も実現し、今後は専用アプリの開発により、活用可能な楽器や機器、ユーザー数、ユーザー層と活用シーンの拡大を目指している。 「STI for SDGsアワード2021」の審査では、芸術・文化を科学技術と組み合わせてSDGs達成のための手段として活用している独創性の高さや、オンラインの活用による汎用性の確保、医療機器としての可能性、体験者が指導者となって社会に貢献する役割を持たせている包摂性・展開性等が高く評価され、「誰一人取り残されない未来をつくる」というSDGsの理念に沿った取組であると選考委員会において判断された。

中期計画 2-1-1-2		【16】大学における研究推進システムの一環として、伝統文化や新たな芸術表現創造に関する研究成果を、大学美術館や奏楽堂等学内施設はもとより、学外施設等も有効に活用した展覧会や演奏会等を通して広く社会に発信する。		
中期目標期間終了時 自己判定		【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) ～ (N) 大学美術館や奏楽堂等、成果発信に係る中核的な施設について、計画的な運営・修繕を行いつつ、本学が有する研究シーズやアーカイブ等をWebサイト等で広く発信し、併せて、学外における成果発信の場を拡充する為の、地方自治体や民間企業、各種芸術文化施設等とのネットワークを拡大していく。	令和２年度に、文化庁の日本博主催・共催型プロジェクトとして、「あるがままのアート―人知れず表現し続ける者たち―」展（共催：NHK、文化庁、独立行政法人日本芸術文化振興会、障害者の文化芸術国際交流事業実行委員会）を本学・大学美術館で開催し、40日間の会期で20,391名の来場者があった。 同展覧会は、既存の美術や流行、教育、障害の有無などに左右されず、ただひたすら自由に独自の世界を創造し続けるアーティストたちに焦点を当て、国内外で注目を集めるアーティストたち総勢25名の約200点の作品を展示し、美術の専門教育を受けないアーティスト（知的障害を持つ方々も含む）の活動に注目しながら、美術表現の多様性をプレゼンテーションする機会となった。 また、同展覧会では、様々な理由で会場に直接訪れることが難しい方々を主な対象として、Webブラウザから現地のロボットを操作し、館内展示の様子を家族等と共に映像で鑑賞することができる「ロボ鑑賞会」を導入した。 加えて、令和２年度に、本学・大学美術館で「Turn on the Earth」を開催し、6,490名の来場者を得た。「TURN」は、障害の有無、世代、性、国籍、住環境などの属性や背景の違いを超えた多様な人々の出会いと表現を生み出すアートプロジェクトであり、アーティストが、日本の伝統的な技術や作法を携え、海外の福祉施設や地域コミュニティに通い交流プログラムを通じて作品を制作することを主な内容とし、これまでに世界６か国（アルゼンチン、ペルー、ブラジル、エクアドル、キューバ及びポーランド）で活動を展開してきた。 同展覧会では、透明感のある21色の生地(全長約600m)で展示室に10の共鳴空間をつくり、海外でのTURNに参加した10組のアーティストの作品を展示した。また、海外での活動の様子等は共鳴空間の中にAR（拡張現実）技術を使って紹介し、来場者にTURNの交流をより体感していただける新たな展覧会の試みを取り入れた。オンライン上では、展覧会場で展示されている作品の制作過程を体験できるワークショップを実施するとともに、3D撮影した展示室のVR空間を公開した。 加えて、令和３年２月から３月にかけては、本学と包括連携協定を締結している香川県との共同により、TURNに参加したアーティスト４名がオンラインワークショップを行い、その交流の成果を、国指定重要文化財・旧善通寺偕行社を舞台とした会場展示と三次元バーチャル展示、そして講演会により発信した。

中期計画 2-1-1-3		【17】芸術研究院として再編された分野融合・横断型の研究体制を活かし、芸術諸分野の研究者同士が分野の枠を超えて連携・共同することにより、複合的領域研究を推進する。	
中期目標期間終了時 自己判定	【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【２】中期計画を実施している

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) ～ (G) 学部・研究科および学科・専攻の枠を超えた連携・共同を更に促進し、新しい芸術表現の創造やイノベーションの創出に係る取組を実施する。	文化財及び芸術資源の保存、修復及び活用の調査・研究を行うとともに、全国の大学の教員その他の者の共同利用に供することを目的として、令和３年２月、本学に「芸術資源保存修復研究センター」を創設した。同センターでは、災害による文化財の被害増加への対応、文化財保護法の改正に基づく文化財の活用促進、音楽・映像・デジタルアート等の保存技術が未確立な芸術作品の保存修復方法に係る研究開発等を実施するため、異分野融合・横断型の研究拠点として、芸術資源の保存・修復ネットワークの構築・強化を進めている。 令和２年度は、カブール国立博物館との連携によるメス・アイナク遺跡出土品の調査・修復、陸前高田市等との連携による東北地方太平洋沖地震で被災した文化財の保存修復等を行い、また、本学の大学美術館陳列館において展覧会「日比野克彦を保存する」を開催した。同展覧会では「アトリエの保存」をテーマとして、作品のみならず、画材、生活用品、壁の落書き、マンション、さらにはアトリエが存在する街までをも対象とし、アトリエを構成する各要素について様々な保存事例を提示することにより、アトリエの保存、ひいては作家・日比野克彦の保存に挑んだ。クラウドファンディングの活用により96名から約433万円の支援を受け、展覧会は、14日間の会期で2,448名の来場者を集めたほか、ギャラリートークの様子をオンライン配信し、また、閉会後には、会場を360度撮影することで3Dアーカイブとして展覧会自体も保存しつつ、Webサイトで広く一般に公開した。**(別添資料27-11)** また、分野を横断した取組として、特別支援学校等と連携した美術教育に関する研究・実践を推進した。令和３年度に、東京都立王子特別支援学校からの受託研究に、美術研究科美術教育研究室の教員とデザイン専攻の教員とが協働して取り組み、委託先の希望により、王子特別支援学校にある「王子Cafe」を対象とした、生徒の作品を生かした空間デザインを主題とし、同学校の美術科教員とも協議検討を重ね、最終的に展示された生徒作品によって、「こもれび」を感じられるような柔らかな色合いのカフェ空間が実現した。更に、東京都立八王子特別支援学校からも受託研究を受け、美術研究科美術教育研究室の教員と工芸専攻陶芸研究室の教員とが協働し、肢体不自由児の陶芸・塑造の授業の充実についての研究に取り組んだ。特に陶芸の授業については、陶芸研究室教員の陶土や焼成に関する指導・助言により、肢体不自由のある児童生徒の陶芸制作が充実し、作品の完成度も向上した。

中期計画 2-1-1-4	★	【18】国内及び海外関係機関との研究開発・イノベーション創出等に係るネットワーク基盤を構築するとともに、若手研究者を中心とした人材の相互交流・国際循環等を推進し、他機関・他分野の研究者と連携・共同することにより、学際的領域に関する共同研究等を推進する。		
中期目標期間終了時 自己判定		【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【２】中期計画を実施している

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) ～ (K) 国内及び海外関係機関との研究開発・イノベーション創出等に係るネットワーク基盤を持続的なプラットフォームへと発展させつつ、若手研究者を中心とした人材の相互交流・国際循環を更に促進する。	令和３年10月、本学をはじめとした12の大学・企業・団体の連携による、2030年以降の孤独・孤立の解決に向けた共創拠点計画が、国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)が公募する「共創の場形成支援プログラム」育成型(共創分野)プロジェクトとして採択されたことを受け、本学主導により「『共生社会』をつくるアートコミュニケーション共創拠点」を創設し、超高齢社会に向けて、産学官の協働による「芸術×テクノロジー」の研究で「誰もが孤立しない共生社会」を目指す大規模事業を開始した。(別添資料27-12) 本拠点では、超高齢化に伴う障害と、望まない孤独・孤立を解決すべき社会的課題として捉え、あるべき未来の社会像として「個々人の尊厳が認められ、誰もが生涯を通して社会に参加でき、生きがいと創造性を持って生活できる共生社会の実現」というビジョンに掲げ、多様な人々が結びつく現代社会にあった新しいコミュニティの形を「芸術×テクノロジー」で提案するための研究開発と社会実装を進めていく。 個人の生きがいや尊厳に直結し、人が人として生きるための新しい体験として「文化的処方」を開発し、社会参加の機会となる「文化施設」の利活用を促進させるテクノロジーの開発・導入を進めるほか、誰もが孤立・孤独にならないアートを介したコミュニケーションを持続的に運営・普及させるための社会環境の構築にかかる研究と実践を行う。 拠点創設時からの連携機関として東海国立大学機構（名古屋大学)、横浜市立大学、慶應義塾大学、国立精神・神経医療研究センター、株式会社インビジ、大日本印刷株式会社、SOMPOホールディングス株式会社、ヤマハ株式会社、社会福祉法人台東区社会福祉協議会、独立行政法人国立美術館、公益財団法人東京都歴史文化財団東京都美術館が参画しており、各組織が有する多様な専門性・リソース・ネットワークを活用した取組を展開している。

（２）２－２　研究実施体制等に関する目標

４年目終了時評価結果を変えうるような顕著な変化があったと判断する取組は、以下のとおりである。

小項目 2-2-1	**【Ⅰ－２－（２）－１】** 産業界や国際交流協定締結校等との研究連携を強化し、新領域での研究を推進・活性化するとともに、研究組織体制強化や新たな支援体制を構築し、グローバル化や産業競争力強化等の社会的要請を踏まえた多様な研究を支援する。

≪特記事項≫

○優れた点

①	令和３年10月、本学をはじめとした12の大学・企業・団体の連携による、2030年以降の孤独・孤立の解決に向けた共創拠点計画が、国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)が公募する「共創の場形成支援プログラム」育成型(共創分野)プロジェクトとして採択されたことを受け、本学主導により「『共生社会』をつくるアートコミュニケーション共創拠点」を創設し、超高齢社会に向けて、産学官の協働による「芸術×テクノロジー」の研究で「誰もが孤立しない共生社会」を目指す大規模事業を開始した。 拠点創設時からの連携機関として東海国立大学機構（名古屋大学)、横浜市立大学、慶應義塾大学、国立精神・神経医療研究センター、株式会社インビジ、大日本印刷株式会社、SOMPOホールディングス株式会社、ヤマハ株式会社、社会福祉法人台東区社会福祉協議会、独立行政法人国立美術館、公益財団法人東京都歴史文化財団東京都美術館が参画しており、各組織が有する多様な専門性・リソース・ネットワークを活用した取組を展開している。（中期計画2-2-1-3)

○特色ある点

①	令和３年度、アニメーション分野の教育研究に係る中国･韓国とのネットワークと、ASEAN諸国とのネットワークとを融合し、広くアジアにおいて拡大・展開するプロジェクトとして、「日中韓＋ASEANの文化・経済圏発展に向けた、アニメーション教育・研究のための共創プラットフォーム構築」を新たに開始した。(中期計画2-2-1-1)

○達成できなかった点

①	４年目終了時の評価結果を変えうるような未達成事項等は特になし。

≪中期計画≫

中期計画 2-2-1-1	★	【19】産業界や国際交流協定締結校、海外一線級アーティストユニット等との共同研究や共同プロジェクトを通して、積極的な教員・研究者の交流を行うとともに、アジアにおける芸術研究拠点（ハブ）として、韓国・中国・台湾をはじめ、ＡＳＥＡＮ諸国等との連携基盤を強化するとともに、欧米からの研究者等の受入体制を整備する。		
中期目標期間終了時 自己判定		【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) ～ (J) 産業界や海外大学等との、質の伴う継続的な共同研究や共同プロジェクト、人材交流・国際循環を促進するため、持続可能なネットワーク・連携関係の構築に向けた検討・取組を推進する。	令和３年度、アニメーション分野の教育研究に係る中国・韓国とのネットワークと、ASEAN諸国とのネットワークとを融合し、広くアジアにおいて拡大・展開するプロジェクトとして、「日中韓＋ASEANの文化・経済圏発展に向けた、アニメーション教育・研究のための共創プラットフォーム構築」を新たに開始した。**（【再掲】別添資料27-02）**

中期計画 2-2-1-2		【20】ダイバシティな研究環境を実現するため、コーディネーター・カウンセラー・キャリアアドバイザー・リサーチアドミニストレーターを新たに配置するとともに、研究支援に係る事務体制の強化等、多様な研究活動を支援する体制を整備する。また芸術における革新的な研究活動等を組織的に推進するため、間接経費を活用したインセンティブ付与等の支援システムを構築する。		
中期目標期間終了時 自己判定		【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) ～ (F) 女性研究者や若手研究者等に対する支援の持続・拡大および、シーズ集の充実による多様な領域での産学連携・異分野融合事業の促進。	予定通り取組を実施した。

中期計画 2-2-1-3		【21】新たに設置された芸術研究院において、既存の学部・研究科の枠を超えた分野融合･横断型の研究体制による有機的連携を図るとともに、新領域研究やイノベーション創出を構築するため、国内外関係機関等から多様な人材を配置するなど、研究実施体制の整備を行う。		
中期目標期間終了時 自己判定		【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【２】中期計画を実施している

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) ～ (F) 引き続き学内外の多様な連携による分野融合・横断型の研究体制の充実を図り、新領域の研究やイノベーションの創出を促進する。	令和３年10月、本学をはじめとした12の大学・企業・団体の連携による、2030年以降の孤独・孤立の解決に向けた共創拠点計画が、国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)が公募する「共創の場形成支援プログラム」育成型(共創分野)プロジェクトとして採択されたことを受け、本学主導により「『共生社会』をつくるアートコミュニケーション共創拠点」を創設し、超高齢社会に向けて、産学官の協働による「芸術×テクノロジー」の研究で「誰もが孤立しない共生社会」を目指す大規模事業を開始した。**(【再掲】別添資料27-12)** 本拠点では、超高齢化に伴う障害と、望まない孤独・孤立を解決すべき社会的課題として捉え、あるべき未来の社会像として「個々人の尊厳が認められ、誰もが生涯を通して社会に参加でき、生きがいと創造性を持って生活できる共生社会の実現」というビジョンに掲げ、多様な人々が結びつく現代社会にあった新しいコミュニティの形を「芸術×テクノロジー」で提案するための研究開発と社会実装を進めていく。 個人の生きがいや尊厳に直結し、人が人として生きるための新しい体験として「文化的処方」を開発し、社会参加の機会となる「文化施設」の利活用を促進させるテクノロジーの開発・導入を進めるほか、誰もが孤立・孤独にならないアートを介したコミュニケーションを持続的に運営・普及させるための社会環境の構築にかかる研究と実践を行う。 拠点創設時からの連携機関として東海国立大学機構(名古屋大学)、横浜市立大学、慶應義塾大学、国立精神・神経医療研究センター、株式会社インビジ、大日本印刷株式会社、SOMPOホールディングス株式会社、ヤマハ株式会社、社会福祉法人台東区社会福祉協議会、独立行政法人国立美術館、公益財団法人東京都歴史文化財団東京都美術館が参画しており、各組織が有する多様な専門性・リソース・ネットワークを活用した取組を展開している。

３　社会との連携や社会貢献及び地域を志向した教育・研究に関する目標

４年目終了時評価結果を変えうるような顕著な変化があったと判断する取組は、以下のとおりである。

小項目 3-1-1	**【Ⅰ－３－（１）－１】** 展覧会、演奏会、発表会等を通して、教育研究成果を広く社会へ提供・還元することにより、我が国の芸術文化の振興・発展や地域創生等に貢献する。

≪特記事項≫

○優れた点

①	令和３年度、本学は東京都と連携して「デジタル上野の杜」プロジェクトを実施し、その成果を令和４年３月に公開した。この取組は、上野公園および上野動物園を３Ｄスキャンし、スマートフォン等で体験可能な新しい学びや交流の場となる「デジタル上野の杜」を構築し、リアルでもオンラインでも楽しめる新たなプラットフォームとして、都民のみならず世界へ発信するとともに、計測データを公開することで、上野公園のスマートシティ領域への実装に向けた基盤とすることを目的としている。(中期計画3-1-1-1)
②	ウィズコロナ／アフターコロナを見据え、本学の様々な活動や教育研究成果をデジタル空間上で実践・発信することにより、世界中の人々に芸術が共にあるより豊かな日常を届け、また、次世代を担う芸術の若き才能たちに、活躍と鍛錬の場を提供することを目的として、「東京藝大デジタルツイン」をオープンした。(中期計画3-1-1-2)
③	令和３年度に本学は、文化庁「日本博を契機とする文化資源コンテンツ創成事業」の採択を受け、現代社会における芸術の役割・あり方や新しい可能性を発信し、実践によって示すことを目的とする『東京藝大「I LOVE YOU」プロジェクト』の取組として、「アートによるSDGsへの貢献」を全学的に推進した。本学の在学生、卒業・修了生、研究室を対象とした、SDGsが示す17の目標と169のターゲットに貢献する企画の公募や、大学美術館における『「SDGs×ARTs」展 十七の的（まと）の素（もと）には芸術がある』の開催、アートを通してSDGsを考えるウェビナーやオンライントークイベントの実施等、「SDGs×ARTs」の多様な取組と、その可能性について、広く発信する機会となった。(中期計画3-1-1-3)

○特色ある点

①	中期計画1-3-1-2に記載した「東京藝大アートフェス2021」の更なる展開として、本学と香川県との共催により、香川県善通寺においてAR（Augmented Reality；拡張現実）を駆使した展覧会「TOKYO GEIDAI ART FES BY AUGMENTED REALITY IN 善通寺」を開催した。(中期計画3-1-1-1)
②	東京2020組織委員会、東京都、岩手県、宮城県、福島県及び株式会社LIXILと連携し、令和元年より「東京2020復興のモニュメント」プロジェクトを展開し、令和３年12月にその集大成として、岩手県、宮城県、福島県の被災三県にモニュメントを設置し、お披露目式を開催した。このモニュメントは、被災三県の仮設住宅で使用されていた窓などのアルミ建材を再生して作られたものである。東京2020大会の期間中は、モニュメントおよびメッセージボードが、オリンピックスタジアム（国立競技場）近くの聖徳記念絵画館前に設置され、被災地からの応援や感謝のメッセージが、多くのアスリートや大会関係者、そして世界へ届けられた。そして今般、モニュメントにアスリートからのサインを載せ、東京2020大会のレガシーとして被災地に移設され、お披露目式をもってプロジェクトの完了となった。(中期計画3-1-1-3)

○達成できなかった点

①	４年目終了時の評価結果を変えうるような未達成事項等は特になし。

≪中期計画≫

中期計画 3-1-1-1	★	【22】地域の自治体や国内外の関連機関・企業等との連携基盤を一層強化し、日本各地における早期教育プロジェクトやアートプロジェクト等の諸活動を自治体等との共同により継続的に実施する。		
中期目標期間終了時 自己判定		【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) ～ (H) 本学の研究シーズの発信・活用等により新規事業の開拓を促進しつつ、産学・地域連携事業と社会実践型教育プログラムおよび博士後期課程学生等の若手研究者支援との連動を促進していく。	令和３年度、本学は東京都と連携して「デジタル上野の杜」プロジェクトを実施し、その成果を令和４年３月に公開した。この取組は、上野公園および上野動物園を３Ｄスキャンし、スマートフォン等で体験可能な新しい学びや交流の場となる「デジタル上野の杜」を構築し、リアルでもオンラインでも楽しめる新たなプラットフォームとして、都民のみならず世界へ発信するとともに、計測データを公開することで、上野公園のスマートシティ領域への実装に向けた基盤とすることを目的としている。「デジタル上野の杜」は、文化・観光の拠点である上野公園を、リアルだけでなくオンラインでも体験、交流できるプラットフォームの実現を目指すプロジェクトであり、令和３年度は、東京都政策企画局の支援により、本学と東京大学との共同で上野恩賜公園や施設群の３Ｄスキャンを行い、デジタルツインの「メタバース」を実現した。今後は各施設のコンテンツ発信だけでなく、若手芸術家等の活躍や発信の場としての利用を目指していく。**(別添資料27-13)** また、令和３年11月から12月にかけて、中期計画1-3-1-2に記載した「東京藝大アートフェス2021」の更なる展開として、本学と香川県との共催により、香川県善通寺においてAR (Augmented Reality；拡張現実) を駆使した展覧会「TOKYO GEIDAI ART FES BY AUGMENTED REALITY IN 善通寺」を開催した。香川県善通寺市の街中に設置されるAR（拡張現実）マーカーにスマートフォン等をかざすと作品が画面に現れ、スマートフォンが「展示室」となり、マップを片手に街を散策しながら作品を楽しむことができる仕組みを、香川大学創造工学部造形・メディアデザインコース（講師：柴田悠基）の協力を得て実装した。 散策エリアの中央にあたる善通寺市観光交流センターでは、巨大漁網作品のリアル展示を実施し、同作品は、多数の人の協力によって、縄文時代の生活を想像しながら植物の繊維を用い漁網を編み、将来的に地引網に挑戦するプロジェクトの成果物であり、展示に併せて、県民とアーティストが一緒に参加するワークショップも開催した。**(別添資料27-14)**

中期計画 3-1-1-2		【23】大学美術館、奏楽堂や学内ギャラリー、音楽ホール等の施設を活用することにより、本学が有する所蔵品等芸術資源の展示・公開をはじめ、教育研究成果発表としての展覧会、演奏会等を積極的に開催する。		
中期目標期間終了時 自己判定		【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) ～ (K) 大学美術館や奏楽堂等、成果発信に係る中核的な施設について、計画的な運営・修繕を行いつつ、引き続き、教育研究成果の発信に係る場と機会を拡充していく。	ウィズコロナ／アフターコロナを見据え、「芸術の新しい場所」として「東京藝大デジタルツイン」をオープンした。同取組は、本学が生み出す様々なコンテンツの発表、配信を行うための新たなプラットフォームであり、東京藝大の134年の蓄積をもとに、ICTを活用した新しい表現やコミュニケーションを追求し、本学の様々な活動や教育研究成果をデジタル空間上で実践・発信することにより、世界中の人々に芸術が共にあるより豊かな日常を届け、また、次世代を担う芸術の若き才能たちに、活躍と鍛錬の場を提供することを目的としている。 令和２年度には、本学・上野キャンパスの点群データを使った「デジタル藝大ベータ」、パイプオルガンの360度演奏映像や、Matterportによるパイプオルガン内部のバーチャルバックステージツアーなどが体験できる「デジタル奏楽堂」、本学で開催されたコンサートや特別レクチャーの有料配信を行う「プレミアムコンテンツ」、芸術の若い才能や表現、新しい動きなどを伝える情報やトークセッション等のコンテンツを発信する「コミュニティ」等のコンテンツを制作・公開した。 令和３年度は更に取組を推進し、バーチャル空間における活動やコンテンツの発信の基盤となるWebプラットフォームをリニューアルするとともに、3Dスキャナや配信スタジオ・機材を新たに整備し、教員・学生が教育研究活動や各自の制作・発信に活用することができる環境を構築した。また併せて、デジタルツールの使い方やデジタル社会に関する新しい概念・出来事、遠隔授業に係るFD(Faculty Development)など、教職員を対象とした勉強会を定期的に開催した。 加えて、本学の大学美術館の一部である「陳列館」をバーチャル空間で再現し、リアルの会場で開催した大学院映像研究科のゲームコース展と連動させ、バーチャル空間に再現された陳列館の中でも、作品の展示やトークイベントのアーカイブ映像の配信を実施した。更に、「アジアの文化芸術・国際交流」に係る国際シンポジウム２件と実践的なワークショップ３件をデジタルツイン上で開催・配信したほか、令和３年度に本学で実施したコンサートのアーカイブ映像や、本学教員による古楽器の解説映像をデジタルツイン上で公開した。 令和４年１月には、KDDI株式会社および株式会社テレビ朝日との共同事業として、次世代のスターアーティスト候補を発掘し応援する番組「推しスタ」の制作・配信を開始した。 その他、令和４年３月には「デジタル奏楽堂」を活用し、実際に卒業式・修了式が行われる奏楽堂の内部空間を体験しながらライブ配信により式典を見ることができる取組を実施し、卒業・修了生の保護者の方々や教職員・在学生に開放した。**(【再掲】別添資料27-06)**。

中期計画 3-1-1-3		【24】２０２０年東京オリンピック・パラリンピック開催に伴う「文化プログラム」実行に向け、国や東京都をはじめ、政財界や産業界、地域自治体、文化施設、芸術系大学、さらには海外も含めた関係機関等とも緊密に連携・協力することにより、国際水準での戦略的文化芸術事業を先導的に展開する。		
中期目標期間終了時 自己判定		【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【２】中期計画を実施している

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A)～(B)引き続き、国や東京都をはじめ、政財界や産業界、地域自治体、文化施設、芸術系大学、海外関係機関等と連携・協力し、我が国の芸術文化の振興・発展に向けたプログラムを展開していく。	令和３年度に本学は、文化庁「日本博を契機とする文化資源コンテンツ創成事業」の採択を受け、現代社会における芸術の役割・あり方や新しい可能性を発信し、実践によって示すことを目的とする『東京藝大「I LOVE YOU」プロジェクト』の取組として、「アートによるSDGsへの貢献」を全学的に推進した。本学の在学生、卒業・修了生、研究室を対象として、SDGsが示す17の目標と169のターゲットに貢献する企画の公募を行い、132件の申請の中から、SDGsに係る外部専門家も参画した審査によって58件を選出した。また、企画実施のための助成金を、若手芸術家の支援を目的としたクラウドファンディング等を原資として、合計2,000万円支給した。各企画の概要・成果はWebサイト上にアーカイブとして蓄積し、これからの社会を見据えた、様々な形による芸術の可能性・重要性を、継続的に発信している。 また、本学・大学美術館においては、『「SDGs×ARTs」展 十七の的（まと）の素（もと）には芸術がある』を開催した（入場者数4,646人）**(別添資料27-15)**。同展覧会は、『SDGsの17の目標の中に何故「芸術」はないのか？』をテーマとして、「芸術はSDGsに接続できるのか？」という問いについての様々な取り組みや試行錯誤のプロセスを発信することを目的とし、上記の公募で採択された企画の中から22件について、取組内容や成果を発信する展示とした。同展覧会は、展示空間の3Dスキャンを含むアーカイブをオンライン上で公開しており、「SDGs×ARTs」の実践を引き続き国内外に発信している。加えて、展覧会の関連イベントとして、「東京藝術大学×東京大学　～アートを通してSDGsを考える～」と題したウェビナーや、「SDGs×ARTs展 オンライン トークイベント」を開催した。いずれも動画の視聴者数が2,000名を超えており、本学における「SDGs×ARTs」の多様な取り組みと、その可能性について、広く発信する機会となった**（別添資料27-16,17）**。 また本学は、東京2020組織委員会、東京都、岩手県、宮城県、福島県及び株式会社LIXILと連携し、令和元年より「東京2020復興のモニュメント」プロジェクトを展開し、令和３年12月にその集大成として、岩手県、宮城県、福島県の被災三県にモニュメントを設置し、お披露目式を開催した。このモニュメントは、被災三県の仮設住宅で使用されていた窓などのアルミ建材を再生して作られたものである。東京2020大会の期間中は、モニュメントおよびメッセージボードが、オリンピックスタジアム（国立競技場）近くの聖徳記念絵画館前に設置され、被災地からの応援や感謝のメッセージが、多くのアスリートや大会関係者、そして世界へ届けられた。そして今般、モニュメントにアスリートからのサインを載せ、東京2020大会のレガシーとして被災地に移設され、お披露目式をもってプロジェクトの完了となった**（別添資料27-18）**。

小項目 3-1-2	**【Ⅰ－３－（１）－２】** 社会人のキャリアアップに必要な高度かつ専門的な知識・技術・技能を身につけるためのプログラムをはじめ、生涯学習・リカレント教育等多様な受講者ニーズ、ユニバーサルアクセスに対応した総合的な教育支援プログラムを構築・提供する。

≪特記事項≫

○優れた点

①	令和２年度、青森県からの委託事業「あおもり文化みらいびと育成事業企画・運営業務」において、美術教育と工芸科染織の両研究室が協力し、縄文文化をテーマとした文化芸術体験・学習プログラムとして、オンラインを活用して小学校３校（計150名）および中学校１校（計228名）等にて植物繊維を使った網制作のワークショップを実施した。本事業は青森県を舞台に、縄文文化にかかわる自然素材を用いた造形活動と食生活をつなぐ美術プログラムであり、かつ、子どもたちが主体的・対話的に取り組めるよう、新学習指導要領を踏まえ、教育委員会等と連携し、学習効果の高い体験・学習プログラムを作成するものである。令和３年１月には、上記ワークショップの成果をもとに「青森市小学校教育研究図工部会」で青森市内の小学校教諭30名を対象にオンラインによるワークショップを行い、教育現場の理解と協力に向けて意見交換を行い、本プログラムが実際の授業として採用されることとなった。

○特色ある点

①	令和２年度、袋井市が進める「彫刻のあるまちづくり」事業の一環として、同市の中学生24名を対象とした彫刻のレリーフ制作ワークショップを開催したほか、荒川区教育委員会からの委託研究「幼児期における美術の造形と表現による可能性についての実践的研究」においては、「卒園記念に銅版画をつくろう」と題した造形プログラムを、区立東日暮里幼稚園で園児12名を対象に、オンラインを活用して保護者や他の区内幼稚園とを結びながら実施し、園児が制作した銅版画は同幼稚園の修了式で卒園記念作品として贈呈された。

○達成できなかった点

①	４年目終了時の評価結果を変えうるような未達成事項等は特になし。

≪中期計画≫

中期計画 3-1-2-1		【25】キャリアアッププログラム実施はもとより、生涯学習やリカレント教育の観点から、履修証明制度を活用したプログラムや公開講座をはじめ、本学独自の多様な教育支援プログラムやコンテンツを構築・提供することにより、受講者ニーズに対応する。		
中期目標期間終了時 自己判定		【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) ～ (I) 履修証明プログラムや公開講座、地方自治体との連携による市民向けの講座や早期教育プロジェクト等を引き続き実施しつつ、企業人向けのプログラムを順次拡充していく。	令和２年度、青森県からの委託事業「あおもり文化みらいびと育成事業企画・運営業務」において、美術教育と工芸科染織の両研究室が協力し、縄文文化をテーマとした文化芸術体験・学習プログラムとして、オンラインを活用して小学校３校（計150名）および中学校１校（計228名）等にて植物繊維を使った網制作のワークショップを実施した。本事業は青森県を舞台に、縄文文化にかかわる自然素材を用いた造形活動と食生活をつなぐ美術プログラムであり、かつ、子どもたちが主体的・対話的に取り組めるよう、新学習指導要領を踏まえ、教育委員会等と連携し、学習効果の高い体験・学習プログラムを作成するものである。令和３年１月には、上記ワークショップの成果をもとに「青森市小学校教育研究図工部会」で青森市内の小学校教諭30名を対象にオンラインによるワークショップを行い、教育現場の理解と協力に向けて意見交換を行い、本プログラムが実際の授業として採用されることとなった。 また、令和２年度、袋井市が進める「彫刻のあるまちづくり」事業の一環として、同市の中学生24名を対象とした彫刻のレリーフ制作ワークショップを開催したほか、荒川区教育委員会からの委託研究「幼児期における美術の造形と表現による可能性についての実践的研究」においては、「卒園記念に銅版画をつくろう」と題した造形プログラムを、区立東日暮里幼稚園で園児12名を対象に、オンラインを活用して保護者や他の区内幼稚園とを結びながら実施し、園児が制作した銅版画は同幼稚園の修了式で卒園記念作品として贈呈された。

４　その他の目標

（１）４－１　グローバル化に関する目標

４年目終了時評価結果を変えうるような顕著な変化があったと判断する取組は、以下のとおりである。

小項目 4-1-1	**【Ⅰ－４－（１）－１】** 国際交流協定校や芸術関係団体をはじめ、世界トップクラスの芸術系大学等との連携・ネットワーク基盤の強化を図り、国際舞台で活躍し、世界の芸術文化を牽引できる人材を継続的に育成・輩出するための人材育成プログラムを整備する。

≪特記事項≫

○優れた点

①	国際共同教育プログラムの蓄積・成果に基づく更なる発展として、大学院美術研究科において、タイのシラパコーン大学と博士後期課程のダブル・ディグリープログラムを構築・開始した。また、同・修士課程では、ポーランドのヴロツワフ大学とダブル・ディグリープログラムを創設した。(中期計画4-1-1-1)
②	大学院映像研究科において、「日中韓学生アニメーション共同制作 co-work」を、初めての試みとして、企画から仕上げまでの共同制作の全てのプロセスをオンラインで実施した。また、成果に基づく発展として、韓国芸術総合学校との間でダブル・ディグリープログラムを構築したほか、これまでの取組をASEAN諸国にも拡大するプロジェクトとして、「日中韓＋ASEANの文化・経済圏発展に向けた、アニメーション教育・研究のための共創プラットフォーム構築」を令和３年度に開始した。(中期計画4-1-1-1)
③	映像研究科ゲームコースにおいて、南カリフォルニア大学とのオンラインを活用した国際的な双方向の教育手法を実施し、教員・学生の交流・制作・講評会、ゲーム作品の共同制作におけるBurndown Chart(制作進行表)を用いたチームメンバーの役割や各工程の重要度等の視覚化、成果発表展覧会のオンライン開催等、ウィズコロナ／ポストコロナにおける有効なモデルケースを示すことができ、令和２年10月の教育再生実行会議高等教育ワーキング・グループにおいて効果的な事例として紹介された。(中期計画4-1-1-1)

○特色ある点

①	４年目終了時の評価結果を変えうるような顕著な変化と判断できる取組等は特になし。

○達成できなかった点

①	４年目終了時の評価結果を変えうるような未達成事項等は特になし。

≪中期計画≫

中期計画 4-1-1-1	★ ◆	【26】国際交流協定校等との共同プロジェクトについて、本学のカリキュラムへの反映を拡充し、平成３３年度までに、３０科目以上の国際共同授業を整備するとともに、ジョイントディグリーを含めた国際共同カリキュラム・コースワークを８コース以上整備する等、国際舞台で活躍し、世界の芸術文化を牽引できる人材を育成するための教育プログラムを開発する。		
中期目標期間終了時 自己判定		【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) ～ (E) 海外大学との国際共同授業科目やプロジェクトについて、国際共同カリキュラムやコースワーク等への発展的な展開を検討する。また、各プログラム等の継続的な実施と教育的効果の検証・改善および、国際共同学位課程(ダブルディグリーまたはジョイントディグリー)への移行に係る検討を進める。	国際共同教育プログラムの蓄積・成果に基づく更なる発展として、大学院美術研究科において、タイのシラパコーン大学と博士後期課程のダブル・ディグリープログラムを構築・開始した。また、同・修士課程では、ポーランドのヴロツワフ大学とダブル・ディグリープログラムを創設した。 加えて、大学院映像研究科において、「日中韓学生アニメーション共同制作 co-work」を、初めての試みとして、企画から仕上げまでの共同制作の全てのプロセスをオンラインで実施した（**【再掲】別添資料27-01**）。また、成果に基づく発展として、韓国芸術総合学校との間でダブル・ディグリープログラムを構築したほか、これまでの取組をASEAN諸国にも拡大するプロジェクトとして、「日中韓＋ASEANの文化・経済圏発展に向けた、アニメーション教育・研究のための共創プラットフォーム構築」を令和３年度に開始した。（**【再掲】別添資料27-02**） 更に、映像研究科ゲームコースにおいて、南カリフォルニア大学とのオンラインを活用した国際的な双方向の教育手法を実施し、教員・学生の交流・制作・講評会、ゲーム作品の共同制作におけるBurndown Chart(制作進行表)を用いたチームメンバーの役割や各工程の重要度等の視覚化、成果発表展覧会のオンライン開催等、ウィズコロナ／ポストコロナにおける有効なモデルケースを示すことができ、令和２年10月の教育再生実行会議高等教育ワーキング・グループにおいて効果的な事例として紹介された。（**【再掲】別添資料27-03,04,05**）

中期計画 4-1-1-2	★ ◆	【27】海外の芸術系大学等との国際交流協定について、交流活動の内容や有効性をはじめとする連携の質を精査しつつ、平成３３年度までに、協定締結数を８０大学規模に拡充するとともに、大学以外における海外の芸術団体・楽団・ギャラリー等の連携機関数を１１０機関規模に拡充する。		
中期目標期間終了時 自己判定		【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) ～ (G) 海外大学・機関や国際的な芸術関係団体・組織等との持続的な相互交流関係の構築に向けた検討・取組の推進。	予定通り取組を実施した。

小項目 4-1-2	**【Ⅰ－４－（１）－２】** 学生の国際流動性を高めるため、学生の海外留学・海外派遣および留学生の受入プログラム等を充実し、支援体制を強化する。

≪特記事項≫

○優れた点

①	令和２年度および令和３年度は、オンラインを積極的に活用し、新しい形での国際共同授業等を展開・拡充していくことで、国際的な教育研究環境の構築を促進し、年間約400名の学生が海外一線級アーティストによる指導や、海外大学等との共同授業に参加し、グローバルな学習機会を得た。（中期計画4-1-2-1）
②	本学の入試における外国人留学生志願者数については、2015年度入試に対する2019年度入試の実績値が、学士課程では23名から41名と約２倍に増加、修士課程では106名から417名と約４倍に増加、博士後期課程では31名から54名に増加してきたところ、2020年度入試および2021年度入試のそれぞれの数値は、学士課程で44名・24名、修士課程で498名・517名、・博士後期課程で50名・67名と、大学院課程で引き続き増加傾向を維持している。（中期計画4-1-2-2）

○特色ある点

①	４年目終了時の評価結果を変えうるような顕著な変化と判断できる取組等は特になし。

○達成できなかった点

①	海外留学・海外派遣学生数については、コロナ禍の影響により、実際の渡航を伴う形式での実績値は目標に届かなかったが、一方で、オンラインを活用し、新しい形での国際共同授業等を展開・拡充していくことで、グローバルな教育研究環境の充実を図ることができた。（中期計画4-1-2-1）
②	受入留学生数については、コロナ禍の影響により目標値に届かなかったが、一方で、オンラインを活用し、新しい形での国際共同授業等を展開・拡充していくことで、グローバルな教育研究環境の充実を図ることができた。（中期計画4-1-2-2）

≪中期計画≫

中期計画 4-1-2-1	★ ◆	【28】国際交流協定校との単位互換・認定制度の拡大をはじめ、海外留学等を目的とした奨学金制度の拡充や、学生の海外留学・海外派遣を総合的に支援する組織・体制を充実させることにより、平成３３年度までに、年間単位での海外留学・海外派遣学生数を４００人規模に拡充する。		
中期目標期間終了時 自己判定		【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【２】中期計画を実施している

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A)～(J)引き続き、学生の海外留学・海外活動に係る経済的支援制度や海外派遣プログラム等の機会を充実する為、寄附金等の募集強化や、海外大学・機関等との持続的なネットワークの構築を進めていく。	令和２年度および令和３年度は、オンラインを積極的に活用し、新しい形での国際共同授業等を展開・拡充していくことで、国際的な教育研究環境の構築を促進し、年間約400名の学生が海外一線級アーティストによる指導や、海外大学等との共同授業に参加し、グローバルな学習機会を得た。 令和２年度、美術分野では、ロンドン芸術大学およびパリ国立高等美術学校と、３大学の共同によるオンラインでのプログラムを実施したほか、イギリスのAAスクールや中国美術学院との共同授業も実施した。音楽分野では、オンラインプラットフォームを活用し、パリ国立高等音楽院の即興科と合同で即興創造講座を行うなど、新しい形の授業を実施した。映像分野では、南カリフォルニア大学とのオンラインを活用した国際的な双方向の教育プログラムを実施したほか、日中韓３カ国の学生によるアニメーション作品の国際共同制作(Co-work)についても、企画から仕上げまでの共同制作の全てのプロセスをオンラインで実施した。また、アートプロデュース分野では、国立台北芸術大学芸術跨域研究科との共同により、「Museum Without Border」をテーマとして、数か月間に亘る芸術文化交流プログラムをオンラインで実施した。 令和３年度も引き続きオンラインを活用した国際共同授業等を積極的に実施し、美術分野では新たに、ウガンダのマターズ大学との共同プログラムや、メルボルン大学とのジョイントリサーチプロジェクトおよび２カ国での成果展、西安美術学院とのオンライン交流、ミュンスター美術アカデミーとのオンラインワークショップ、中国・清華大学主催の「第1回国際芸術デザイン教育交流大会」やタイ・シラパコーン大学主催の「第1回国際陶芸学生展」への参加等、多数の国際共同教育プログラムを展開した。音楽分野では、パリ国立高等音楽院、ジュリアード音楽院など海外一流の大学(音楽院)等から卓越教員又は特別招聘教授を雇用又は招聘し、個人指導・グループレッスンを実施した。映像分野では、国際的な映画監督等の海外一線級アーティストや、南カリフォルニア大学やフランス国立映画学校の教員を本学の卓越教授・特別講師等として配置し、オンラインによる特別講義・ゼミナール・講評会を開催した。アートプロデュース分野では、アメリカのニューヨーク市立大学やデューク大学、スウェーデンの大学等から講師を招聘し、オンラインによる特別講義を開催したほか、タイのシラパコーン大学の教員・学生との共同授業として、「ポスト資本主義時代のアジアのアートと展覧会」についての講演、ディスカッション、リサーチ発表等を実施した。

中期計画 4-1-2-2	★ ◆	【29】国際交流協定校との交換留学制度等の留学生受入プログラムの拡大をはじめ、修学や生活支援を担うチューター機能強化や日本語教育の充実、レジデンス機能強化、留学生を支援する組織・体制等を充実させることにより、平成３３年度までに、年間単位での受入留学生数を５００名規模に拡充する。		
中期目標期間終了時 自己判定		【２】中期計画を実施している	４年目終了時 判定結果	【２】中期計画を実施している

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A)～(G)外国人留学生の受け入れに係る支援体制の強化や、日本人学生と外国人留学生との交流機会の拡充。	コロナ禍の影響により、海外からの入国が困難な状況が続き、交換留学および短期プログラム等による海外大学の学生の受入等も停止してしまったため、年間単位での本学における外国人留学生の在籍数については、2016年度～2019年度にかけては、283名・341名・383名・408名と推移してきたところ、2020年度～2021年度は、365名・351名にとどまった。 一方で、上記中期計画4-1-2-1に記載の通り、オンラインを活用した海外大学等との共同授業や交流機会を充実し、グローバルな教育研究環境を構築した。 また、本学の入試における外国人留学生志願者数については、2015年度入試に対する2019年度入試の実績値が、学士課程では23名から41名と約２倍に増加、修士課程では106名から417名と約４倍に増加、博士後期課程では31名から54名に増加してきたところ、2020年度入試および2021年度入試のそれぞれの数値は、学士課程で44名・24名、修士課程で498名・517名、・博士後期課程で50名・67名と、大学院課程で引き続き増加傾向を維持している。

小項目 4-1-3	**【Ⅰ－４－（１）－３】** 　世界最高水準の教育研究体制・大学運営体制を構築するため、国際通用性を見据えた採用・研修・人事評価制度を段階的に整備する。

≪特記事項≫

○優れた点

①	４年目終了時の評価結果を変えうるような顕著な変化と判断できる取組等は特になし。

○特色ある点

①	４年目終了時の評価結果を変えうるような顕著な変化と判断できる取組等は特になし。

○達成できなかった点

①	海外大学での教育研究活動歴を有する教員や海外での学位取得教員等について、コロナ禍の影響により外国人教員等の招聘が困難となったため、目標値までは届かなかったものの、オンラインを活用することにより、遠隔での実技指導や特別講義等の機会を充実し、グローバルな教育研究体制が充実した。（中期計画4-1-3-1）
②	外国人職員等数および一定以上の外国語運用能力を有する職員数について、いずれの指標も目標値までは届かなかったものの、継続的な語学研修や国際関係業務の組織的な遂行等により、事務組織のグローバル化は大きく進展しており、組織全体としての国際対応能力の向上が図られた。（中期計画4-1-3-2）

≪中期計画≫

中期計画 4-1-3-1	★ ◆	【30】世界一線級アーティストを含む外国人教員をはじめ、海外大学での教育研究活動歴を有する教員や海外での学位取得教員等について、平成３３年度までに２００人規模に拡充するとともに、教育研究に係る大学の意思決定に係る外国人教員の参画についての制度設計・運用体制整備を進める。		
中期目標期間終了時 自己判定		【２】中期計画を実施している	４年目終了時 判定結果	【２】中期計画を実施している

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) ～ (I) 引き続き、多様な芸術家・指導者および実務家等の継続的な招聘・配置を進めつつ、若手教員等の海外大学との相互交流を促進する。	コロナ禍の影響により、海外大学・機関等からの外国人教員等の招聘が困難になったが、オンラインを活用することにより、遠隔での実技指導や特別講義等の機会を充実した。 本計画は、「戦略性が高く、意欲的な目標・計画」に認定されており、外国人教員数や海外での学位取得者数等について、目標値までは届かなかったものの、教員組織のグローバル化は大きく進展しており、組織全体としての国際対応能力の向上が図られた。

中期計画 4-1-1-2	◆	【31】教育研究体制を支援する事務組織のグローバル化を推進するため、外国人職員をはじめ、海外での職歴を有する職員や海外大学での学位取得職員等数について、平成３３年度までに２０名規模に拡充するとともに、ＴＯＥＩＣスコア７００相当以上の外国語運用能力を有する職員数を８０％規模まで拡充する。		
中期目標期間終了時 自己判定		【２】中期計画を実施している	４年目終了時 判定結果	【２】中期計画を実施している

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) ～ (D) 国際通用性の高い職員の雇用促進と、語学研修の継続的な実施。	外国人職員や海外大学での学位取得職員等については、2015年度時点で5名だったのに対し、2021年度時点では13名に増加した。また、一定以上の外国語運用能力を有する職員数は、2015年度時点では約20%だったのに対し、2021年度末時点で約60%に達した。 本計画は、「戦略性が高く、意欲的な目標・計画」に認定されており、いずれの指標も目標値までは届かなかったものの、継続的な語学研修や国際関係業務の組織的な遂行等により、事務組織のグローバル化は大きく進展しており、組織全体としての国際対応能力の向上が図られた。

小項目 4-1-4	**【Ⅰ－４－（１）－４】** 国内はもとより、海外に向けての教育研究成果の発信を推進し、国際的な芸術文化の発展・振興に寄与するとともに、芸術文化外交戦略をもって我が国の国際プレゼンスを向上させる。

≪特記事項≫

○優れた点

①	令和３年度、本学・美術学部と11の海外連携大学等との国際共同プロジェクトとして、国立新美術館において「地球・人をアートで問う」をテーマとする「TURN 茶会」を開催した。会場となる国立新美術館の展示室の大空間には竹で組んだ12の茶室を設け、中央に位置する茶室では、オンラインで海外の芸術大学と本学の教員とがテーマに沿って話をしながら手を動かし、互いの心を交わした。（中期計画4-1-4-2）

○特色ある点

①	令和２年度に、「東京藝大インタラクティブアジア月間」と題し、アジア地域との国際交流に焦点をあてたオンラインでの国際シンポジウム・国際フォーラム、芸術ジャンルごとのテーマによるディスカッションイベントを開催した。令和３年度も継続し、「東京藝大デジタルツイン」の活用により、「アジアの文化芸術・国際交流」をキーワードとする２つの国際シンポジウムと、３つの実践的なワークショップを開催した。（中期計画4-1-4-2）
②	令和３年度に、本学とチューリッヒ芸術大学、在日スイス大使館、芸術文化観光専門職大学の共催による国際会議「スマートシティと創造性：都市論と文化論の新たなる地平を目指して」を開催した。（中期計画4-1-4-2）

○達成できなかった点

①	４年目終了時の評価結果を変えうるような未達成事項等は特になし。

≪中期計画≫

中期計画 4-1-4-1		【32】国際共同カリキュラムの実施レポート、シラバス等の教育情報、世界的に評価の高い文化財保存・修復等の研究成果に関する情報、さらには教員や学生をはじめ、卒業生も含めた本学関係者の国際的な活動状況や受賞・入賞実績等の成果を積極的に公開するとともに、多言語による情報発信を段階的に進める。		
中期目標期間終了時 自己判定		【２】中期計画を実施している	４年目終了時 判定結果	【２】中期計画を実施している

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) ～ (E) 国際的な教育研究活動に係るレポートや成果、本学が有する研究シーズ等に係る国内外への情報発信を充実する。	予定通り取組を実施した。

中期計画 4-1-2-2	★	【33】海外における教員・学生の制作・展示・公演等の活動について、平成３３年度までに、年間単位での実施数を７０件程度とすることを目標とし、国際舞台における教育研究成果の公開を推進する。また、海外連携大学・機関等との連携による、海外の芸術文化資源を活かした共同プロジェクトや新興国等に対する芸術教育研究に係る総合的な支援等、国際的な芸術文化外交に資する取組を推進する。		
中期目標期間終了時 自己判定		【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) ～ (I) 海外における芸術活動の促進に係る機会と支援の充実。	海外における教員・学生の制作・展示・公演等の活動について、令和元年度時点で年間70件以上の実施を記録し、令和２年度および令和３年度は、コロナ禍の影響により、海外での活動は停滞したものの、オンラインを活用した海外大学等との国際共同プロジェクトを多数実施し、国際的な芸術活動の機会を充実した。
(A) ～ (I) 海外における展覧会・演奏会等の発信活動に係る拠点形成として、海外大学・機関との持続的なネットワークおよび交流関係の構築。	オンラインを活用した海外大学等との交流を促進し、持続的なネットワークを構築した。具体的な取組として、令和２年度には「東京藝大インタラクティブアジア月間」と題し、アジア地域との国際交流に焦点をあてたオンラインでの国際シンポジウム・国際フォーラム、芸術ジャンルごとのテーマによるディスカッションイベントを開催した。令和３年度も継続し、「東京藝大デジタルツイン」の活用により、「アジアの文化芸術・国際交流」をキーワードとする２つの国際シンポジウムと、３つの実践的なワークショップを開催した。(別添資料27-19) また、令和３年度、本学・美術学部と11の海外連携大学等との国際共同プロジェクトとして、国立新美術館において「地球・人をアートで問う」をテーマとする「TURN 茶会」を開催した。会場となる国立新美術館の展示室の大空間には竹で組んだ12の茶室を設け、中央に位置する茶室では、オンラインで海外の芸術大学と本学の教員とがテーマに沿って話をしながら手を動かし、互いの心を交わした。(別添資料27-20) 加えて令和３年度に、本学とチューリッヒ芸術大学、在日スイス大使館、芸術文化観光専門職大学の共催による国際会議「スマートシティと創造性：都市論と文化論の新たなる地平を目指して」を開催した。

（３）４－３　男女共同参画推進に関する目標

４年目終了時評価結果を変えうるような顕著な変化があったと判断する取組は、以下のとおりである。

小項目 4-3-1	**【Ⅰ－４－（３）－１】** イノベーション創出やグローバル展開等大学改革・機能強化と有機的に連動したダイバシティな教育研究活動、大学運営を推進する観点から、男女共同参画に関する推進体制・環境整備や各種支援システム等を充実させる。

≪特記事項≫

○優れた点

①	令和２年12月に、芸術の力、そして芸術家のキャリアの多様性を広く社会に発信する試みとして、「０歳から大人まで楽しめるファミリーコンサート「音もだち航空 サンタを探せ！大作戦の旅」」をオンライン配信も併用して開催した。 同コンサートは、子育てをしながら演奏活動を続けている本学出身の声楽家らが考案した、世界の名曲をちりばめたストーリー仕立てのプログラムとリトミックで、音楽の素晴らしさを全身で体験し、親子で楽しむことができる演奏会であり、オンライン配信の視聴回数は4,000回を超えた。（中期計画4-3-1-1）
②	令和２年８月から９月にかけて、本学・大学美術館の陳列館において、11人の女性アーティストによる展覧会「彼女たちは歌う Listen to Her Song」を開催した。同展覧会は、身体、ジェンダー、ジェネレーション、国、政治、環境、時代などの違いを尊重し、物理的・心理的距離を超越して異なるものたちが出会い、交流し、理解しあうことの可能性について、女性アーティストたちの作品を通して考察することを目的としている。 展覧会に併せて、ウェブマガジン『彼女たちは語る』を発行し、女性差別の体験、ジェンダーや教育のあり方やその未来に関する参加アーティストたちによるディスカッションを掲載した。加えて、オンライン配信のトークイベントを３回行い、YouTubeの合計再生回数が10,000回を超えるなど、大きな反響を呼んだ。（中期計画4-3-1-1）

○特色ある点

①	４年目終了時の評価結果を変えうるような顕著な変化と判断できる取組等は特になし。

○達成できなかった点

①	４年目終了時の評価結果を変えうるような未達成事項等は特になし。

≪中期計画≫

中期計画 4-3-1-1		【40】学長の下に、男女共同参画推進をはじめとするダイバシティな教育研究活動、大学運営を推進するための組織を新設し、迅速な意思決定による人員配置や支援メニューの実行等、機動性・即応性を活かした女性教職員支援を行う。また今後一層の飛躍が期待される女性教員（研究員相当含む）の任用割合を、平成３２年度までに、概ね４５％まで増加させる。		
中期目標期間終了時 自己判定		【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている	４年目終了時 判定結果	【３】中期計画を実施し、優れた実績を上げている

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) ～ (H) ダイバーシティな教育研究体制・環境の構築に向けた更なる施策の充実による、男女共同参画の推進。	令和２年12月に、芸術の力、そして芸術家のキャリアの多様性を広く社会に発信する試みとして、「０歳から大人まで楽しめるファミリーコンサート「音もだち航空 サンタを探せ！大作戦の旅」」をオンライン配信も併用して開催した。同コンサートは、子育てをしながら演奏活動を続けている本学出身の声楽家らが考案した、世界の名曲をちりばめたストーリー仕立てのプログラムとリトミックで、音楽の素晴らしさを全身で体験し、親子で楽しむことができる演奏会であり、オンライン配信の視聴回数は4,000回を超えた。**(別添資料27-21)** また、令和２年８月から９月にかけて、本学・大学美術館の陳列館において、11人の女性アーティストによる展覧会「彼女たちは歌う Listen to Her Song」を開催した。同展覧会は、身体、ジェンダー、ジェネレーション、国、政治、環境、時代などの違いを尊重し、物理的・心理的距離を超越して異なるものたちが出会い、交流し、理解しあうことの可能性について、女性アーティストたちの作品を通して考察することを目的としている。アーティストたちの「境界」の曖昧さと揺らぎの表現に着目し、男と女、人間と非人間、過去の人物や家族を独自の観点からみつめなおし、性や種、場所や時代を超越した新たな関係性を探求した。展覧会に併せて、ウェブマガジン『彼女たちは語る』を発行し、女性差別の体験、ジェンダーや教育のあり方やその未来に関する参加アーティストたちによるディスカッションを掲載した。加えて、オンライン配信のトークイベントを３回行い、YouTubeの合計再生回数が10,000回を超えるなど、大きな反響を呼んだ。**(別添資料27-22)**

中期計画 4-3-1-2		【41】男女の機会均等を実現し、ダイバシティな大学の管理・運営の実現に向けての施策・方針決定へ参画を拡充するため、女性上位職の割合を、平成３２年度までに、概ね２５％まで増加させる。		
中期目標期間終了時 自己判定		【２】中期計画を実施している	４年目終了時 判定結果	【２】中期計画を実施している

○2020、2021年度における実績

実施予定	実施状況
(A) ～ (D) ダイバーシティな教育研究体制・環境の構築に向けた更なる施策の充実による、男女共同参画の推進。	上記中期計画4-3-1-1に記載の通り、芸術系大学の特徴を踏まえつつ、男女共同参画推進やダイバシティな教育研究環境の構築に係る取組を積極的に実施した。